



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2015.3.1 発行 NO.34

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

提案1

将来の家族と同時に、人類の存続を担う 子どもの育ちのグランド・デザイン

■大人のかかわりが子どもの体験の機会を妨げる可能性がある

【事例1】

「どうして散らかすの！」

とお母さんの声に、子どもはおもちゃを投げつける。壁にぶつかり、おもちゃは、その形を失い、散乱する。

「どうしてあなたは、いつもそうなの？」

お母さんはつい怒鳴り声をあげてしまう。

びちゃ！ わーん ばたばた！

1歳半の子を抱えた親子の光景である。

この光景をあなたはどう思いますか。

このお母さんは、散らかっているのが嫌なだけで、いつも、ついつい声を荒げてしまう。

【事例2】

ある時、園で、さきちゃんという子が、ゆいちゃんを噛んでしまう。

「どうして噛むの？」と保育士は、さきちゃんを抱きしめて、優しく聞く。さきちゃんから出てくる言葉をゆっくりと待つ。でも、さきちゃんは、何もいわず、だまって、怒った顔のまま。保育士は噛まれたゆいちゃんも引き寄せて、「痛かったね」「後で痛いのとってあげるね」と片ひざにのせ、両方の子を抱き、二人の気持ちが治まるのを待つ。「だって、ゆいちゃんが押したから」と、さきちゃんが話す。

「そう押されたのね」「それで噛んじゃったのね」「うん」と頷くさきちゃんは、2歳半の女の子だ。ゆいちゃんもいう。「だってゆいちゃんだって、あきらちゃんにおされたから」「そう。あきらちゃんがおしたから、さきちゃんにぶつかったのね」

二人の園児の顔が、安心した顔に変わっていった。二人とも先生にわかってもらいたかったのだ。

「ゆいちゃん痛かった？」保育士は聞く。「うん痛かった」さきちゃんは黙っている。「二人ともどうす

るの？」二人とも無言だ。保育士は二人の手を合わせ、「噛まれると痛いから、次からは噛まないでね。ちゃんと言葉で『なんで押すの？』って聞いてね」と、さきちゃんに聞いて聞かせる。

「あら、あら、歯形がついちゃって、痛かったわね。今冷やすから、ちょっと待っててね」

この二つの事例には、育ちの価値の違いが見られる。それは、乳児期の大人のかかわり方の違いである。

事例1は、お母さんも子どもも、自分の気持ちをストレートに出している。だがこのような時、親に対する援助能力が問われる場面である。大部分が、この親子に「駄目だよ」と対応するのが通常かもしれない。

しかし、この事例では、お互いの気持ちがストレートに現されていることで、お互いの気持ちを保育者が感じ取り、そこに向き合うきっかけを提供してくれていると捉えることもできる。子どもの怒る気持ちは何だったのか。親の嫌いだったことが何だったのか。その行動と気持ちを理解するところから援助してこの親子の気持ちを聞いていくうちに、お互いの気持ちの通訳者に援助者がなれて、自分の思いをぶつけて終わってしまうのではなく、子どもの気持ちに関心を寄せられるようになっていけるのではないだろうか。

しかし、お互いに嫌なことは嫌だと素直に出してくれるのは周囲にもわかりやすい。こうした素直な表現力は周囲の問題解決能力につながることもあるから、一概に駄目ということもできない。そこには親子という絆もあることを忘れてはいけない。この親子も、自分の気持ちをストレートに出すところが、将来生きてくる可能性がある。

事例2は、保育園で日常よく見られる光景である。このようなトラブルが起きた時、我々は、噛んだ子が悪く、噛まれた子がかわいそうと単純には見ていない。



必ず背景があり、子どもの気持ちは何なのか、子どもにとって学びの機会なのか、痛みに対してなど、さまざまな視点で対応している。しかもこのような子どもどうしのトラブルが起きても、問題解決能力を生まれる見守りをしている。

しかし一方で、事例2のような体験は、子どもたちが、彼らの集団の中で起こりうるさまざまなもめ事とどう向き合っていくかを学ぶ機会でもある。子どもたちどうしのトラブルは止められないこともある。そのほうが子どもたちの成長にとってはいいことだってある。もちろん、保育士には、「怪我をさせてはいけない」という職業的責任がある。でも、それを極度に恐れているのは、逆に子どもにとっての学びの絶好の機会の芽を摘み取ってしまうこともある。子どもどうしの関係は、子どもの学びの宝庫である。

■乳児は、大人をはるかに超えている

乳児の世話は大変だ。実際、振り回されることも多い。しかし、じっくり観察していると「この子は面白いなあ」と感じるがよくある。時々思うのだ。赤ちゃんは、人間に必要な資質をすべて備えられて生まれてきているのではないかと。

乳児の行動や子どもどうしのかかわりなどを見てみると、そのコミュニケーション能力の意外な高さや、遊びの発見、工夫や展開に驚かされることがある。集中力、時おり見せる優しさ、お腹がすいていたり、うんちが出て不快な時の表情、泣くという表現力などなど、凄いとしかいいようがない。それは一人ひとり違うものだし、時として大人である自分をはるかに超えた能力かもしれないと思ったりする。思えば、私自身、このような驚きの発見こそが、乳児とかかわる仕事に就くきっかけだったのかもしれない。まさに「我以外

皆我師也」である。大げさないい方をすれば、それは「天命」といっていいかもしれないと思っている。

何と幸せな人生だろうか。天の父に「感謝」である。イエスさまは、子どものように素直にならなければ、天の国には入れないと弟子たちに伝えたという。ある意味、子どもは神さまに最も近い存在だということができるだろう。私も日々、子どもたちに接することで、人間にとって何が一番大切なのかを教えられてる。そして、「幼子は、神さまからお預かりした大切ないのち」でもある。大人がその子どもの尊厳を妨げるようなことがあってはならないと切実に思う。

■保育園の存在とは

赤ちゃんは、何と赤ちゃんどうしで育み合っている。

人間は群れの生き物である。誰かとかかわらなければ生きてはいけない。しかし、孤立した生活を強いられている近代社会では、群れの社会生活を学ぶ場は確実に失われている。今の子どもたちは、外で遊ぶ機会をも失っている。時間も場所もないのだ。そして室内で、ゲームやネットでのバーチャルなつながりに終始してしまっているという子も少なくないだろう。そのため、直接他の人と接する能力が退化してしまっていないだろうか。

だが、この社会性を養う機会は、じつは保育園には存在している。先に述べたように、赤ちゃんは赤ちゃんの関係の中で、その振る舞いを見て学んでいるのだ。その体験は、将来にもきっと役立つはずだと思う。そして、乳幼児期の育ち方は、その子自身の将来のみならず、その子が身をおく社会全体の未来に影響するだろう。子ども一人ひとりが社会を形成する存在であるからだ。もちろん、保育園は親が安心して働くために子どもを預ける場である。その役割は否定しないが、もう一つの効用についても一考すべきなのではないかと強く思うのだ。すなわち、子どもだけでなく、大人にとっても、学びの場としての役割について、である。

親は、子どものもっている可能性に出会ってこそ、親自身も養われていくことにぜひ気づいてほしいと思う。ネットや育児書に頼っても、的確な答えは得られはしない。直接わが子と向き合うこと。ぜひ、子ども自身のもつ能力にほれ込んでほしい。特殊な才能のことをいっているのではない。生きる力や学ぶ力、子どもどうしの中で、本当に育まれる力のいかに素晴らし

いことか。親自身も、社会の一員として、そのもつ才能と感性を社会に生かし、人のため奉仕するため生きていることを大事にしてほしいと思う

そして最後に、この世に生命を受け、乳幼児を神さ

まに最も近い存在として、畏敬をもって大事にする社会の構築が、人類の持続可能な地球を守る働きのひとつと気づいてほしいと思う。

(川副孝夫●千葉・風の谷保育園園長)

提案2

保育のグランドデザイン

…確かさと確かさへの疑いから：子どものもつ不思議さと可能性に出会う

★「三分の二の不確実性」がもたらすこと

：謙虚さと探究心と感謝

「子どもと一緒にいることは、三分の一の確実性と三分の二の不確実性と新しさに働きかけることを私たちは知っています。三分の一の確実性は私たちを理解させ、理解しようと試みさせます。(中略)しかし、知らないことは、私たちが探索し続けさせる条件です」(ローリス・マラグッツィ談)

(C.エドワーズら・編、佐藤学・森真理・塚田美紀・訳『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、2001年、136頁)

「どうして散らかすの」「何で嘔むの」…毎日生活をともにしている子どもに対しても思わず口に出てしまうほど、子どもの姿はミステリーに満ちています。これが、ミステリー小説であれば、謎は解けてメダタシメダタシとなるのですが、子どもとの現実の生活はハッピーエンドとはいかないことが多々あります。川副先生の(保育のグランドデザインに向けての)メッセージを読み、イタリアのレッジョ・エミリア市の乳幼児教育の哲学と実践に多大な貢献をされたマラグッツィの上記した言葉が思い浮かびました。

レッジョ・エミリア市の公立の乳児保育所(0~3歳)と幼児学校(3~6歳)には、あらかじめ保育者が決めた年間カリキュラムや月案や週案は存在しません。だからといって、「人がうらやむような技能や即興に依存しているというのは真実ではありません」

(マラグッツィ/上掲書、136頁)というように、活動や子どもとのかかわりのあり方について今までのこと(三分の一の確実性)から予測しつつも、あらかじめ決められた計画に子どもをあてはめる、ということではなく、(三分の二の)不確実性に満ちた子どもの「今」の姿に謙虚に向き合い、探究心をもって生活を創造することの大切さを語っているのです。

ここで一緒に考えたいことは、レッジョ・エミリ

ア市の乳幼児教育施設のようにとのススめではありません。川副先生のメッセージから読み取れるように、保育の場で子どもを大切に語られることは自明ですが、子どもと丁寧に出会う前に確実性に縛られた枠組みの中に子どもを置いているのではないかと保育と保護者がともに語り合い、学び合う探究者として成長させてくれる子どもに感謝の気持ちをもって生活するススめです。散らかしがどういふ子どもの親へのメッセージなのか、嘔むことがどういふ子どもの表現なのか、丁寧に向き合うことで、「聴いてくれる人がいる、わからなくてもわかろうとしてくれる人がいる」と子どもが自分を「よし」「大丈夫」と受けとめ、他者に対して信頼感、尊重心をもてる人として育むことに向けて、歩んでいきたいものです。

★「子どもを大事にする」ということへの再考

「アメリカにおいて私たちは、子どもを焦点としていることを誇りにしているが、それでいて子どもたちが現実に表現している事柄に十分に関心を払ってはいない」(ハワード・ガードナー/上掲書、vi)

この一文は、米国ハーバード大学教授のガードナーが米国の近年の児童中心主義に対して警鐘していることとして読み取れます。それは、川副先生の「乳幼児を畏敬をもって大事にする」という一文と相通ずるの



ローリス・マラグッツィ国際センターの外観

ではないでしょうか。保育は環境を通してといいつつ、あらかじめ決められた固定化された環境構成（空間・時間）の中で子どもが生活することで終始していないか、と考えさせられました。かつて米国の教育哲学者ジョン・デューイは「学校（幼児学校）は社会の縮図」と論じました。保育の場をどういう社会を形成する場として私たちは捉えているのでしょうか。子どもがその社会の中でどのように自分を表現しているのでしょうか。子どもの心身からの声を丁寧に聴くことが今と次世代の社会づくり、すなわち保育のグランドデザインへの糧となりうることでありましょう。

★ESDのための実践ではなく、実践がESDであるように

次世代の社会づくりへとつなぐ世界的課題に「ESD（持続可能な開発のための教育）」があります。当連盟でも保育国際交流運営委員会が『地球にやさしい保育のすすめ—ESD的発想が保育を変える』を出版しました。ユネスコやOMEP（世界幼児教育保育機構）においても毎日の生活自体がESDであるように、と推進しています。ここでは紙面の関係上、詳細については触れませんが、ESDとは「環境の保全・経済の持続可能性・現世代と将来世代にとって公正な社会文化」を踏まえた教育です。すなわち、子ども一人ひとりの命が守られ、尊重することを心に留めて生活することが、子ども自身が今の社会を大切に、そして将来への平和づくりの担い手へ育っていく、と希望をもち、保育に携わる一人ひとりがどういう社会を、世界をデザインするか、と語り合っていきたいものです。

（森 眞理●立教女学院短期大学准教授）

編集後記

◎“命というおおいなる存在”を感じ取って

「どうして散らかすの」と問いたくなるほど、日本の保育・教育は、正味の理念や方法において、ばらつきが大きい。それは「多様性」というククリで収納できる範囲を越えているように思われます。

最近の保育研究は、子どもや赤ちゃんの姿を「三分の一の確実性」に取り込むために進められ、一定の成果をあげていると思います。しかしそれは、子どもや赤ちゃんを研究の「対象」にする、つまり「もの」として扱っている、そんな気がします。今後、その傾向に拍車がかからないか、懸念も小さくありません。こんなふうに言及すると「子どもの健やかな成長を願い、愛おしさを日々の保育に活かすためには科学的な研究が必要だ！」と嘯みつかれそうな気がします。しかし

「研究成果」と「日々の保育」、「世界の子どもたちが置かれている状況」、それらすべてに漂う無形の存在が、子どもと大人、社会と世界を変える原動力になる可能性を感じます。

それは、「愛」「平和」「使命」「神さま」「畏敬の念」「感謝」「謙虚さ」「探究心」（本文より）などの「こころのはたらき」です。人権思想が高まり、あらたな哲学が待望されても、それらを包括した宗教心と愚直に向き合う必要（必然）性が到来した感じです。昨今の混迷を極める国際情勢や経済格差の拡大に思いを寄せる時、それは、一身上の感覚をこえて、世界の人々の言語化されない切実な実感として浮上しているように思えます。意識の重心をこの部分に置いて、子どもを語り、保育を語り実践しないと『持続可能な人類』に成長できない、そんな思いが募ります。

キリスト教を基にした保育を実践されている川副先生の“風の谷”を流れる祈りのようなメッセージ。保育論らしくない保育の深い「お話」にふれた感じです。川副先生は、赤ちゃんを《畏敬の念を抱く存在》として感得し、大人も人類として存在していることを自覚して、社会のあり方を根本（王道としての宗教的見地）から問い直す、そこから真に「持続可能な社会」が誕生する、と解いています。独特の「語り」の中に強い願いが存在しています。

森先生のメッセージは平易でありながら、一句一行、無駄のない濃い文章で、川副先生の「語り」を四方から支えています。本委員会で議論が海外事情に及ぶと、決まって森先生に白羽の矢が放たれます。細身の体の中に保育の「世界ふしぎ発見」が詰まっているからです。今回もガードナーを引用されて、「児童中心主義」という概念から凝視すれば「ものあつかい」になる危険性について論及されています。また、デューイのフレーズから、保育現場のあり方と社会や国家のあり方は相似形だと解かれます。そのとおへり、と認識できますが、その認識を現実の風土に変えるのは、やっぱり意志の力、「こころのはたらき」です。探究心を外に向けて発する一方で自身のものの感じ方、考え方、振る舞い方に対して、“なぜ、なぜ”を繰り返して深く内省しなさいと呼びかけられている気がします。

保育の基本は、子どもや赤ちゃんの声を丁寧に傾聴すること。それは新しい社会づくり、新しい世界づくりの第一歩。そのために「これからの保育」を探求する。では、これからどこへ？あっち、こっち、そっち、日本の保育は未だに行き先が“散らかったまま”です。誰かが怒ってどなり声をあげないか、気がかりです。

これから意見交換の場を津々浦々に設けるにしても、それと並行して、現場で子どもの声に耳を傾ける重要性和様に、仏教、キリスト教など宗派を超えた“いのちというおおいなる存在”との対話が希求されている…。今回の二つのメッセージから、そんな境地に至ったのですが、みなさんはいかがでしょう。

（片山喜章●神戸市・はっと保育園園長）

◆問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp